

琉球大学学術リポジトリ

離島における平和教育教材開発研究2 ―戦争遺跡“西表島「崎山望楼」”遺跡の実態と現状―

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2011-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 剛史, 伊波, 直樹, 山本, 正昭, Yamaguchi, Takeshi, Iha, Naoki, Yamamoto, Masaaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/22292

離島における平和教育教材開発研究Ⅱ

—戦争遺跡“西表島「崎山望楼」”遺跡の実態と現状—

山口 剛史¹ 伊波 直樹² 山本 正昭³

A Study of teaching materials development about Peace Education in Remote Islands
—Possibility of teaching material seen from investigation of actual conditions of
War-related Sites “Iriomote Island Sakiyama Boro ruins”—

Takeshi Yamaguchi, Naoki Iha, Masaaki Yamamoto

1. はじめに

筆者は、拙著において戦争遺跡“西表島船浮要塞”の現地調査から教材開発の可能性について述べた。その際、まとめの中で「まずは科学的な実態調査からはじまり、そこに生き・死んだ人々の経験を重ね合わせることで、平和教育の素材として、子どもたちに『戦争とは何か』を問いかけるものになりえるはず⁴と指摘し、「学校現場においても活用しやすいデータ、地図によるマッピングや写真・映像による図解、証言の整理や文献リスト、モデル教材など、これまでの研究をわかりやすく整理することが求められている⁵とした。船浮要塞をはじめとして、西表島にある戦争遺跡群に関しては拙著でも指摘した通り、いまだ全容が解明されているとは言い難く、地元の人々の記憶によってのみ場所が特定されているものも多い。そのため、保存活用のためには、引き続き詳細な分布調査、現状確認調査が不可欠なものとなっている。

2011年3月、幸いにも沖縄県戦争遺跡詳細分布

調査を担当し、船浮要塞に関しても調査研究を行っている伊波直樹氏、山本正昭氏とともに西表島船浮要塞関連遺跡群の調査を実施し、詳細な実測データや遺構の構造を明らかにすることができた。

そこで本論文では、前回調査（山口2007）ならびに船浮要塞に関する調査研究の成果（伊波・山本2006）をふまえ、いまだ明らかになっていない点の詳細調査を報告することを目的としている。特に、研究論文等で一切紹介されてこなかった西表島崎山に残る通称「望楼（海軍監視所）」に関するついて、現地調査によって明らかになった現状と遺跡の形状について報告する。また本望楼は日露戦争時に活用されたと言われていることから、日露戦争期の文献より望楼建設の経過について明らかにした。本報告が、戦争遺跡保存、平和教育への活用の土台となれば幸いである。

2. 先行研究にみる「崎山望楼」

まず本論文で使用する用語について触れておきたい。調査した崎山にある「望楼（海軍監視所）」

¹ 琉球大学教育学部 Faculty of Education, University of the Ryukyus

² 株式会社島田組 Shimadagumi Co.

³ 沖縄県立埋蔵文化財センター OKINAWA PREFECTURE ARCHEOLOGICAL CENTER

⁴ 山口剛史 田中 洋 島袋 純 全 炳徳 近藤 寛 松元浩一『離島における平和教育教材開発研究Ⅰ—戦争遺跡“西表島船浮・対馬要塞跡”の実態調査から見る教材の可能性—』琉球大学教育学部実践総合センター紀要（14）琉球大学教育学部実践総合センター2007 P.140

⁵ 前掲書

遺跡を指す場合には、「崎山望楼」とした。理由は、日露戦争時は「西表望楼」と称され、アジア・太平洋戦争期（特に昭和16年以降）は、「西表特設見張所」と称されており、住民も「見張所」と呼んでおり時代によって呼称が異なること、戦後西表の住民（特に崎山、網取、船浮の方々）は「ポーロー」とその地区を呼んでおり、現在でも「崎山のポーロー」といえば現地ではこの遺跡の場所を指すためである。

まず、先行研究における「崎山望楼」の取り扱いについてみてみたい。戦争体験として「崎山望楼」に関する体験記録が詳細に記録されているものは、石垣市市史編集室編『市民の戦時戦後体験記録第一集』1983、竹富町史編集委員会編『竹富町史第十二巻資料編戦争体験記録』1996の2冊に書かれた川平永美氏の体験である。川平氏は、崎山望楼にて空襲を体験しており、その様子も体験談して記録しているのは貴重なものである。西表島西部にある崎山、網取、船浮、白浜、祖納、干立の各集落では、船浮要塞（祖納、外離島、内離島、サバ崎）、崎山望楼での軍作業をした住民が多くいた。体験記録の中で、崎山望楼に触れているものは、船浮集落舟浮義雄氏「また、崎山の俗称・ポウロヤマには軍の監視所が設けられ、建設中に二回ほど奉仕作業に行ったことがあった。私たちは、子供だからレンガ運びをさせられた。

遠足で施設見学 軍事施設が完成してからは、海軍記念日の時、遠足で二回ほど施設見学に行った。施設は八角の建物で、大きな双眼鏡が二つあった⁶と興味深い記述がある。ほかには、網取集落嘉弥真慶吉氏の「網取の南南西にある崎山の先端に道路があり、そこに米軍潜水艦を監視する見張り塔があった。川平永美さんは、そこに詰めていたようで、空襲警報が発せられると網取までやってきて、メガホンを手にも『警戒警報発令』と住民に伝え回った。住民への伝令は、昼夜を問わず空襲警報が出ると行われた⁷」という川平永美氏の行動を証言したのものもあるが、その他は「外離島

での作業のない日は、崎山の監視所にも行ったこともあった」（網取集落山城スミ氏）などがあるだけである。軍人による記録として船浮要塞に駐屯していた鉄田氏による『鉄田義司日記』補遺の1943（昭和18）年6月1日（火）に崎山村より西表島南岸にある鹿川に向かう途中「海軍望楼の下を海岸沿いに船を進める⁸」という記述があるのみである。

そのような中、戦争遺跡としての崎山望楼を紹介したのは、元石垣市職員の松島昭司氏である。松島氏は、八重山毎日新聞（2003年10月11日）、八重山地区タウン誌「やいま」に、崎山望楼を発見したルポを投稿している⁹。「望楼発見物語—亜熱帯原生林を行く—上下」と題されたルポは短いながらも、戦争遺跡発見の苦勞が記されている。松島氏は平成14年9月に4度目の調査で見つけたとしている。ここで貴重な成果となっているのは、望楼跡のコンクリート基礎が見えるように伐採した写真を残している事である。¹⁰



写真① 望楼発見物語上より



写真② 望楼発見物語下より

⁶ 竹富町史編集委員会編『竹富町史第十二巻資料編戦争体験記録』1996 P.757

⁷ 前掲書P.795

⁸ 竹富町史編集室『鉄田義司日記』補遺 竹富町史だより第20号 竹富町史編集室 2001.9.28 P.10

⁹ 松島2009。

¹⁰ 写真は松島2009の写真を本人の許可を得て転載させていただいた。

一方、軍事記録に関してはどうであろうか。こちらでも防衛庁防衛研修所戦史室著「戦史叢書沖縄方面海軍作戦」にわずかな記述があるだけである。このように、崎山望楼の文献による実態把握は困難な状況にあり、より体験者の掘り起しなどから、少しでもその機能や徴用の実態に関して把握することが重要となっている。

3. 調査の経緯

本調査は、2011年3月5～6日に実施した。調査は執筆者3名に、西表島船浮集落在住で、公民館館長（2011年4月現在）である池田米蔵氏に協力を依頼し実現した。池田氏は、[山口2007]においても調査協力を依頼し同行して頂いた方で、西表島出身の方々から「ポーローには大きなミカン木がある」という話も聞いており、たびたびミカンをとりに行ったこともあったという¹¹。筆者もミカン（シークワサー）を取りに一緒に連れて行ってもらった際、監視所の存在を教えてくださいました。すでに崎山望楼の存在を知る方も地元では少数となっている。前回の調査では、十分な伐採をすることができず、その概要を掴む事しかできなかったが、3月の調査では測量を含めた調査を実施する事ができれば、松島氏の報告をより具体的にすることができるものと、調査に望んだ。



写真3：望楼を望む

ここではまず、西表島崎山ならびに崎山望楼の場所について確認していきたい。西表島は、沖縄本島より南西に約450km離れた沖縄県で2番目に大きい島である。現在人口は2000人ほどの島で、行政は竹富町に属する。崎山は、西表島最西端に位置する集落であった。崎山村は、1755年波照間島、網取集落、鹿川集落、祖納集落からの強制移民により村立てされたといわれている。集落は、アジア・太平洋戦争後の1947年に廃村となっている。現在は、数名が住民票を登録し自給自足の生活をしている。

崎山望楼は崎山集落よりも北西にある。場所は地図を参照いただきたい。ヌバン崎の北東にある浜が通常ヌバンの浜と呼ばれている場所で、崎山集落が最初に村たてをしようとした場所でもある。この浜の一番西に川が流れておりこの川をさかのぼる形で、内陸部に入る。しばらくすすむと川が二手に分かれているので、右側の川筋を登っていく。そのまま進むと大きな岩場にぶつかるのでその左側を登っていくと頂上付近に到着する。(図1参照)

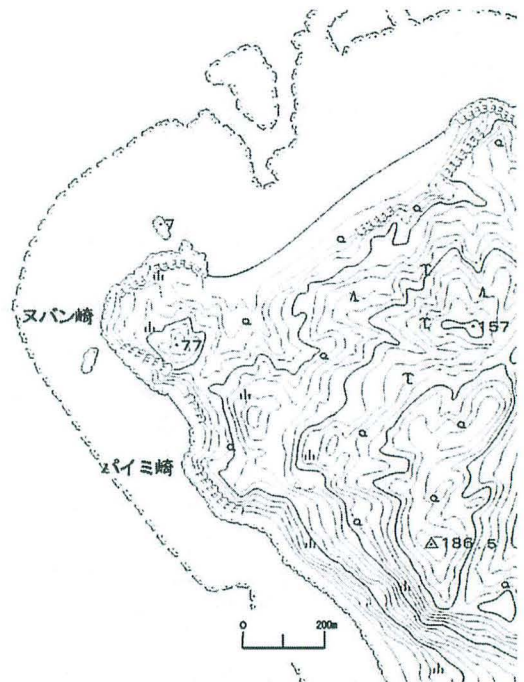


図1：崎山望楼位置図

¹¹ 筆者聞き取り

4. 望楼跡の遺構

今回の調査において、2基の建物跡を確認する事が出来た。いずれもコンクリート基礎が残存し

ているが、建物の平面形状、立地等異なる特徴が見られたため、ここでは建物跡①、②として各詳細を述べる。

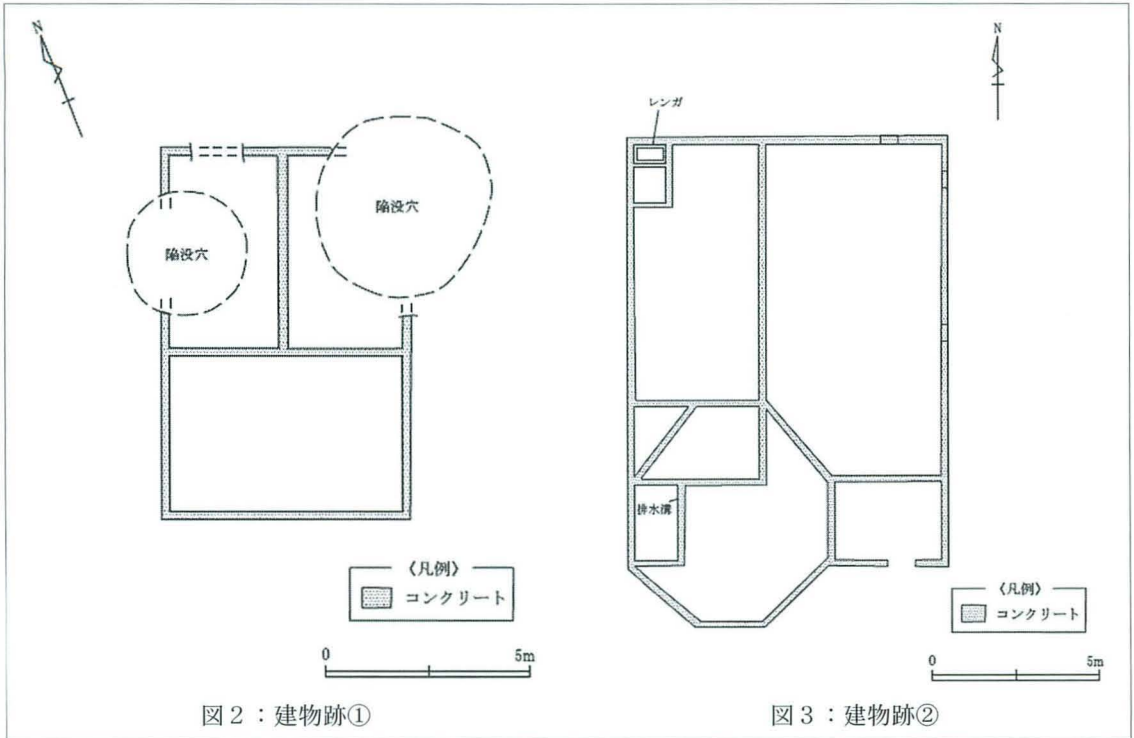


図2：建物跡①

図3：建物跡②

(1) 建物跡①

建物跡①は先述した川筋を登坂する丘陵の頂部付近に立地する(図2)。現在はコンクリートの建物基礎のみを見る事ができ、地表面から10cm~20cmほど露頭する。しかし、雑木の繁茂による樹根の張り出してヒビ割れ、剥離が所々に見られ、残存状況は良好とは言えない。また、コンクリート枠の幅は25cmで一定している。

建物の平面形状は9m×6mの長方形を呈し、北東-南西方向に長軸を有する。内部空間は長軸の梁を丁度半分に区切り、北東側の半分はさらに2分しているため、3つに部屋割りされている事が窺える。また、建物のコンクリート基礎が無くなる形で2ヶ所陥没穴が見られる。陥没穴はいずれも建物の北東側に位置している。一つは直径約4.5m×4mのやや楕円形で、もう一つは直径約3mのほぼ円形を呈する。前者の陥没穴では、建

物の東隅が、後者では北西側の外枠がいずれも破壊され、コンクリートの残骸が散乱している状況が見られる。

建物跡①周辺の状況としては、後述する建物跡②より一段低い場所を平場造成しており、北東側が浜から建物跡①に至る下り斜面となる。また、南東側の一部では、建物建設時に伴う法面を成形した形跡が見られたが、南西側は雑木が繁茂し、海を望めるような状況にはなかった。

(2) 丘陵頂上部の建物跡②

先述の建物①から南東へ約30m登坂した丘陵の頂上部に建物跡②が立地する(図3)。この建物跡②も基礎のコンクリート枠とその周辺に礎石のみが残存している。コンクリート枠は地表面から10~25cmほど露頭しており、ヒビ割れや崩壊は一部確認できるものの、平面形状は窺うことができ、

残存状況は良好と言える。またコンクリート枠の幅は20cmで全体的に一定となっている（図版7、8）。

建物平面形状は12.5m×7.3m長方形を基本とするが、南西部分のみ南側へ張り出している。内部空間はコンクリートの梁からおおよそ4つに部屋割りされているのを窺うことができる。そのうち南西側の部屋が八角形構造となっているのが特徴的であると言える。建物の基礎枠が八角形構造となる事例として八重山諸島では平久保の海軍特設見張所跡（石垣市）が挙げられるが（沖縄県立埋蔵文化財センター2006）、八角形の単独建物であることから、建物跡②とは形態を異にする。現段階において類似建物は管見の限りでは見られない。この西端には1.5m×2.4m深さ約40cmのコンクリート製の半地下式の枡が見られた。この貯水池の北東隅には下水管が残っており、東方向に伸びていくのが確認された。

南東の部屋は4m×3mと最も狭い空間となっており、南東隅のコンクリート枠が1.2m途切れている部分が見られた。おそらく外へ通じる出入口であるものと思われる。また、西側のコンクリート枠上には金具が残存しているのを確認した（写真17）。

北側の2部屋はとくに広く部屋割りされており、北東側の部屋は最大面積を有している。この部屋の北側に1ヵ所、東側に2ヵ所のコンクリートが凹状に一段低くなっている部分が見られる。幅は50cmと狭いことからこの機能としては床下の風通しを考えた通気孔、もしくは排水用の孔であると想定される。

北西側の部屋は北東側の部屋に比べて一回り小さい。北西隅にはコンクリート部材を煉瓦状に立ち上げた2m×1.5mの枠組を確認することができた。コンクリート枠の内側面に接して立ち上げており、コンクリートブロックが10段組み上げられていた（図版10、11）。更にコンクリートブロック相互の目地はコンクリートで埋めているが、とくに表面の処理は成されておらず、雑な仕上げとなっている。内部は東西方向に仕切られており、北側は残りが良好である。天井部分までは残存しておらず、周辺にコンクリート部材が大量に散乱している。残存高は約1mとなっている。一方で

南側はコンクリート基礎枠程度の高さしか残っていない。この枠組についての用途は不明で、今後において更なる検証を加えていく必要がある。

それぞれの部屋相互を繋いでいた出入口の痕跡は全く確認できなかったため、建物内部の導線については不明である。また上物についてはコンクリート壁と思われる痕跡やその廃材が周辺に見られなかったことから、木造であった可能性が高い。

この建物跡②一带は下草が繁茂していたため人力による伐開作業を行った結果、上記の様相を把握することができた。しかし周辺状況については調査時間の都合もあり十分な伐開作業を行うことができなかった。よって今後における補足調査の必要性を認識しつつ、今回の調査で判明できた範囲で建物跡②の周辺状況について記しておきたい。まず周辺施設であるが、南西側の部屋から更に南西側へ2.1mの位置に砂岩の石積み台座を1基確認することができた。90cm×70cmで高さは約1m、上面はコンクリートが貼られており、中央やや手前に15センチ四方の孔が1つ下方に向かって開けられている。コンクリートはヒビ割れや崩落などは全く見られなかった（写真18）。この遺構については具体的にどのような用途であったのか特定することはできなかった。

この建物跡②及びその周囲は平場造成がなされており、すぐ西側と南側は急斜面となっており、海を望むことができる。北側も平場が続いていくが、その範囲については確認することができなかった。東側は緩斜面となっており南東方向には建物①が位置する。このことから建物②への進入路は東側に取り付いていた可能性が指摘できる。

（3）崎山望楼跡の建物跡についての検証

現在見られる戦争遺跡においては建物跡が確認された事例は極めて少ない。沖縄県戦争遺跡詳細分布調査を八重山諸島地域で実施した際に確認された建物跡は平久保の海軍特設見張所跡と船浮要塞跡（竹富町）の兵舎跡と弾薬庫跡の2ヵ所のみである。前者については既述したので触れないが、後者においては兵舎跡12棟、弾薬庫跡は5棟が確認されている。何れもコンクリート基礎枠だけが残り、平面形が長方形となる。

今回確認された建物跡に関しては建物跡①の平

面形は長方形となることから、とくにその形態的特徴を見出すことはできないが、建物跡②では特異な全体平面形状や複雑な部屋割りといった、船浮要塞跡の事例とは明らかに異なる様相を示している。またコンクリート部材を煉瓦状に積み上げる技法も建物跡②のみで見られる特徴である。これらから建物跡②は他と明らかに異なる構造と形態であることから、その構築時期あるいは構築目的が全く異なることが考えられる。更に建物①ではコンクリート基礎を破壊する形で陥没穴が2

カ所見られたのに対し、建物①及びその周辺では陥没穴が確認されていない。この建物跡①に見られる陥没穴についてであるが、川平永美氏による戦時体験記録（石垣市史編集室 1982）の証言があり、「年月は忘れましたが…この日の空襲で海軍の見張所は爆弾で全滅し、…崎山を撤収していきましました。」から、建物の基礎が破壊・散乱するほどの状況が陥没穴に見られる現状を踏まえると、2ヶ所の陥没穴は空襲による爆撃痕である可能性が高いと考えられる。

建物跡②より建物跡①の方が集中的に空襲を受けていることについては、その明確な理由は導き出せないが、少なくとも言えることは建物跡①が攻撃目標となる目立つ建造物（高層的な建造物）だったか、もしくは建物②が重要施設であったがゆえに偽装されていたことから、攻撃目標から外れたことも考えることができる。

何れにせよ今回確認された2棟の建物跡についてはあまり共通性を見いだせないものであり、その残存状況も大きく異なっていることも当該望楼跡の特徴として捉えることができる。



写真4 建物跡①南東側基礎（南西から）



写真5 建物跡①外枠と中央部間取り（北西から）



写真6 建物跡①内部間取り（北から）



写真7：建物②東側布基礎（北から）



写真8：建物②北側布基礎（東から）



写真9：建物②西側布基礎（南東から）



写真10：建物②北西隅の枠組（北西から）



写真11：建物②北西隅の枠組（東から）



写真12：建物②北西隅の枠組（南西から）



写真13：建物②南西側の半地下式の枡（北東から）



写真14：半地下式の枡内の配水管（南西から）



写真15：建物②南西側布基礎（東から）



写真16：建物②南側布基礎（南東から）



写真17: 建物②の基礎に残る金具



写真18: 石積み台座（東から）

5. 「崎山望楼」の建設（日露戦争期における「西表望楼」）に関わる文献資料

これまで見てきたように本調査において崎山望楼に関する現状を明らかにすることができた。しかし、「崎山望楼」に関する史料は明治期、つまり日露戦争時期にさかのぼることで見ることができる。つまり「崎山望楼」は日露戦争の際つくられた仮設望楼として建設されたことに起源を持つ。ここでは、その起源について先行研究、文献から整理してみたい。

先行研究として、沖縄における望楼建設に関する歴史的検討を行っているのは、(吉浜2003)である。吉浜の検討した内容を踏まえ、望楼建設の設置に関して確認できたことを述べてみたい。吉浜は、海軍省「公文備考」の検討を通じ、中城湾需品支庫と喜屋武村（現糸満市）の海軍望楼に関する検討を行っている。喜屋武村の海軍望楼に関しては、その起源を1902年までさかのぼり、望楼としての設置を「喜屋武村が海軍望楼敷地を寄付した2年後の1904年（明治37年）8月9日、内令第325号によって全国79カ所に望楼が開設された。その中には喜屋武望楼と西表望楼が含まれている」¹²と述べ、(原剛2002)を引用しその成立を示している。喜屋武望楼に関しては、1914年の状

況を記述しているのみで、吉浜本人も今後の課題の中で述べる通り、「1904年（明治37）には喜屋武望楼、開設年は現在のところ不明だが辺土崎望楼・平安名望楼・西表望楼、と本格的な補給・監視通信基地を沖縄に開設した。」¹³「喜屋武望楼は大かた明らかになったが、辺土崎望楼・平安名望楼・西表望楼については『公文備考』の範囲でしか分かっていない」¹⁴としている。

原が記述の根拠とした海軍省編『海軍制度沿革』によると、海軍望楼に関する記述が存在する。本資料は、1971年に復刻された資料で、巻三（一）の中に「第十九節 海軍望楼」の中に全国ならびに植民地、占領地の望楼に関する記載がある。¹⁵そこでは、西表望楼として明治37年8月9日設置で明治38年10月19日廃止というデータが一覧表から読み取ることができる。

そのうえで、本稿では「極秘 明治37.8海戦史」の記述を中心に望楼の設置について見ていきたい。本書は海軍司令部による編集で、一部より十二部まであり、総冊数は百五十冊にのぼる膨大な記録文書である。冒頭には、「本戦史ハ事概子軍機ニ屬シ秘密ヲ要スヘキモノニシテ就中我力帝國々防及ヒ外交ニ關スル事項並ニ諜報ノ手段及ヒ其ノ關係者ニ就テハ殊ニ極メテ秘密ニスヘシ」¹⁶とある。文書は、国立公文書館アジア歴史資料センター¹⁷

¹² 吉浜忍『『公文備考』にみる沖縄の海軍施設』『史料編集室紀要』第28号 沖縄県教育委員会2003 P.66

¹³ 前掲P.67

¹⁴ 前掲P.68

¹⁵ 海軍省編『海軍制度沿革』巻三（一）原書房1971 P.696-700

¹⁶ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C05110029600、極秘明治37.8年海戦史総目次／目次「極秘明治37.8年海戦史総目次」（防衛省防衛研究所）

¹⁷ URLは、<http://www.jacar.go.jp/>

の資料閲覧にて防衛省防衛研究所の資料、海軍一般史料の⑨その他にデータがアップされており、すべてのページを閲覧することができる。ここでは、「明治37.8海戦史」の記述にみる崎山「望楼」についてみていきたい。なお、史料においては海軍の正式名称は西表望楼となっている。そのため今後は西表望楼として記述していく。

望楼に関する記述は、「第四部防備及ヒ運輸通信巻四第四章望楼」¹⁸に記載されている。具体的にその記述を見てみると、「明治三十七八年戦役中望楼一覧表」に喜屋武望楼、西表望楼の2つが掲載されており、佐世保鎮守府所管海軍望楼、鎮守府直屬望楼として以下のような項目でしめされている。

常設若クハ假設	望楼名	所在	電信局ト連絡スル通信器	艦船ニ對スル通信器ノ設備	起工年月日	竣工年月日	開始年月日	配員	備人通船
假設	喜屋武	沖縄本島南部	電話	完備無線電信アリ	三七、八、二七	三七、九、一五	三七、九、一六	准士官一、下士二、卒四	人夫一
假設	西表	八重山列島西表島	電話	完備無線電信アリ	三七、八、二七	三七、九、一五	三七、九、一七	准士官一、下士二、卒一	人夫一

表1：明治三十七八年戦役中望楼一覧表¹⁹

その地図が掲載しており、地図で確認することができる²⁰。望楼設置に関しては[原2002]の記載と同じく、「九日山本海軍大臣ハ、坊ノ岬、浦崎、喜屋武崎、西表島、釣掛崎、韓国蔚島、同濟州島、同牛島、同巨文島及ヒ同蔚山港角ニ、假設望楼ノ設置を令ス、(望楼一選定報告ハ備考文書ニ在リ)」²¹とある。実際に備考文書には、「五十五號 明治三十七年九月八日海軍中尉馬來新一ノ提出セル釣掛崎防ノ岬屋久島浦崎西表島喜屋武崎假設望楼ノ位置選定報告書」²²という文書が掲載されている。当時の海軍がどのように西表島を認識していたのかを知るうえでも引用してみたい。

「西表島ノ西端

西表島ノ西端八重目崎ニ於テ海圖上二四七呎ノ少シク内方ニ於テ位置ヲ選定ス北三十三度東ヨリ北西南ヲ經テ南二十二度東ニ至ル區域ヲ展望シ得ルナリ與那国島、沖ノ神島及ヒ波照間島ノ中央

迄ハ其ノ視界中ニアリ其ノ高サハ詳ナラサルモ約三百呎内外トス海岸ハ珊瑚礁岩ニシテ平穩ナル天候ニ於テハ小舟着岸シ得清水ハ遠カラサル溪谷ヨリ湧出ス此ノ處ヨリ崎山及ヒ船浮等ニ海陸交通シ得ルモ寒村ニシテ糧食ヲ得ルコト困難ナルヘシ風土病ノ流行盛ナレハ是ニ對スル警戒肝要ナリ飯匙蛇ハ近年稀ニシテ害毒モ大島ノ如ク大ナラスト」²³

このように地勢の特徴だけでなく、水の有無から周辺の集落の様子、食糧事情、風土病（マラリアのことか）、飯匙蛇（ハブ）まで記述されていることは、駐屯のための諸条件を検討していることがうかがえる。

第四章望楼の本文記述に戻ると、表にもある通り「西表望楼ハ十七日（中略）各事務を開始ス」²⁴とある。その後、「十一月十六日鯨島佐世保鎮守府司令官ハ、山本海軍大臣ヨリ左ノ訓令ニ接ス、左記鸞鑾鼻外七箇所ノ望楼ニハ漸次無線電信ヲ装

¹⁸ JACAR：C05110030100、極秘明治37.8年海戦史総目次／第4部防備及ヒ運輸通信（防衛省防衛研究所）

¹⁹ ACAR：C05110109900（第8画像目から）、極秘明治37.8年海戦史第4部防備及ヒ運輸通信巻4／第3編通信／第4章望楼（防衛省防衛研究所）より。表はその他の望楼もあるため、2つのみをピックアップし、「同」はわかりやすく再度記載した。

²⁰ ACAR：C05110109900（第21画像目）

²¹ ACAR：C05110109900（第42画像目）

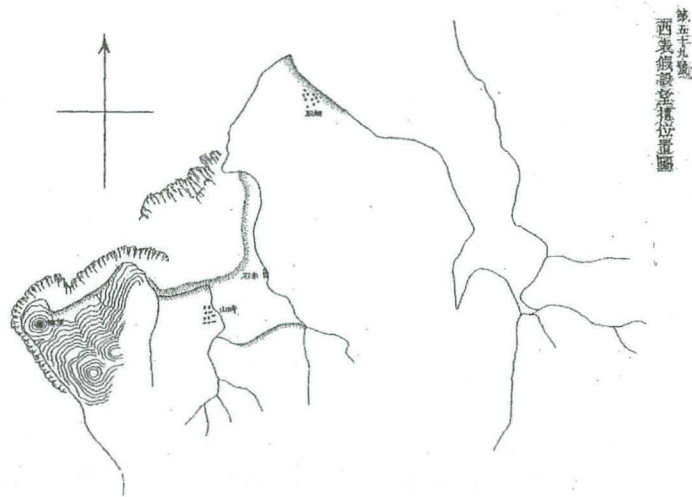
²² ACAR：C05110110100（第7画像目）極秘明治37.8年海戦史第4部防備及ヒ運輸通信巻4／備考文書（防衛省防衛研究所）

²³ ACAR：C05110110100（第391画像目）

²⁴ ACAR：C05110109900（第43画像目）

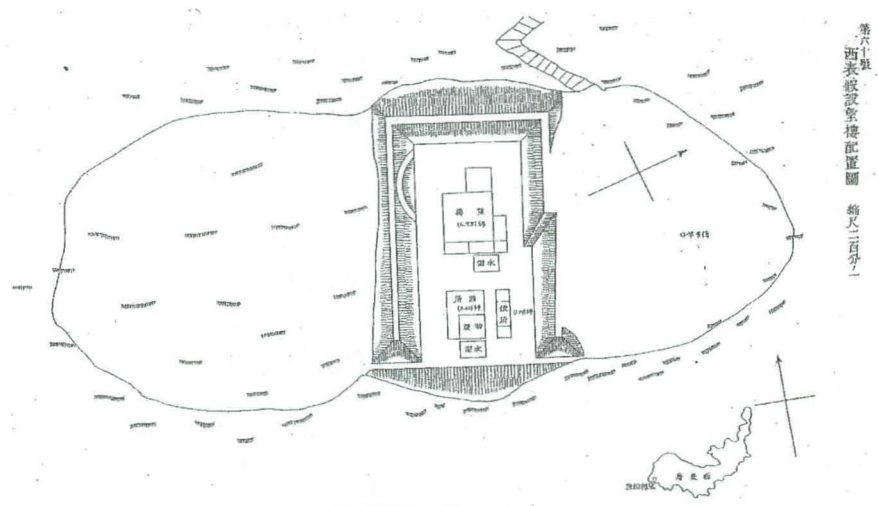
備スヘシ 追テ器具機械中外國注文ニ係ルモノアリ
 来一月中旬ニ至ラサレハ全部到着セサルモ其ノ
 中若干ハ不遠受領ノ見込ナルヲ以テ到着次第時々
 之ヲ其ノ府ニ送致セシムヘキニ付左記順序ニ基キ
 設置方取計ヲフヘシ」²⁵ とあり、西表島は2番目に
 設置することとなっている。ちなみに喜屋武は3

番目である。これ以上の詳細な記述は本文にはないが、「第8部 会計経理巻6. 7. 8 別冊」²⁶ には、
 附圖としてさまざまな位置図が掲載されている。その第五十九號、第六十號、第六十一號がその位置図となっているので、今回調査したものと照らし合わせるべく紹介したい。



アジア歴史資料センター
 Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jcaz.ac.jp/>

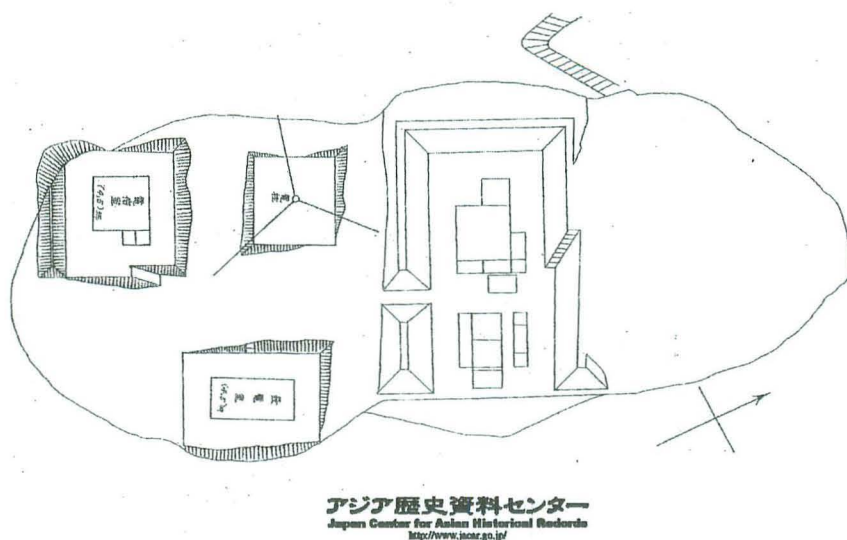
図4：第五十九號西表假望樓位置図²⁷



アジア歴史資料センター
 Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jcaz.ac.jp/>

図5：第六十號西表假望樓配置図²⁸

²⁵ ACAR : C05110109900 (第44画像目)
²⁶ ACAR : C05110160300
²⁷ ACAR : C05110172200
²⁸ ACAR : C05110172300



第六十一號
西表島無線電信柱外二廉建設位置圖
縮尺二百分一

図6：第六十一號西表島無線電信柱外二廉建設位置図²⁹

望楼のその後に顛末については、本文に記述がある。1905（明治38）年は日本海海戦があり、日露戦争は講和へと向かう。その年、「九月二十二日鮫島佐世保鎮守府司令長官ハ、伊集院海軍司令部次長ヨリ左ノ電報二接ス、佐世保鎮守府所管望楼中平和克復後左記ノ者ヲ常設トシ其ノ他ノ者ハ閉鎖若クハ撤去ス」³⁰とあり、その中に喜屋武望楼は含まれているものの、西表望楼は含まれていない。その後、10月15日には次のような命令が出される。

「十五日平和克復シ、十九日日本海軍大臣ハ左記望楼ノ廃止ヲ令ス」とあり、西表もその中に入っている。つまり、日露戦争時に建設された西表望楼は戦争後にその役目を終え、いったんは廃止となっているのである。このことは、八重山民謡誌にある「日露戦争当時、望楼台を設置して、軍人がバルチック艦隊の動行を監視していた。ここより内離の郵便局を経て、八重山郵便局に通信していた。この望楼台より、バルチック艦隊の北上を通信したので、信濃丸は早くもキャッチ東郷艦隊は世界史上に輝く専科を得たのであった。この望楼台の跡は、大正三年頃まで残存していたのであった。筆者はその実跡を視察した」³¹とある。バル

チック艦隊発見の記述については、「極秘明治37.8海戦史」にそのような記述を見出すことはできなかったが、廃止されていること、その跡は残っていたことなどは、一致しているといえるだろう。

5. 今後の課題

本稿では、2011年3月時点の発見されている「崎山望楼」についての現状について詳細に報告することができた。現在確認している「崎山望楼」は指摘したように昭和期に建設されたものであろうことは、竹富町史の証言等からも推測できる。しかし、日露戦争期の「西表望楼」と現在確認している望楼とが同一の場所であるのかは不明である。図4にある地図に照らすと、現在確認している望楼とは場所が違うことになる。現在の場所が正しく、望楼を改築したのか、移築しているのかなど不明な点が多い。再度現地調査し確認をすすめたい。

また、文献上不明な点が多い。1904年の仮設西表望楼建設に関する詳細な設置過程、吉浜の指摘した1914年の建設に関わる史料の不在、1941年における特設見張所設置に関わる史料の不在など、

²⁹ ACAR : C05110172400

³⁰ ACAR : C05110109900 (第47画像目)

³¹ 喜舎場永珣「八重山民謡誌」沖縄タイムス1967 P.394

文献上も確認する事項が多く存在する。これらを今後の課題としたい。

なお本研究は科研費若手研究(B)「沖縄戦を中心とした平和教育教材開発研究」にて実施されたものである。

参考・引用文献

山口剛史 田中洋 島袋純 全炳徳 近藤寛 松元浩一『離島における平和教育教材開発研究Ⅰ—戦争遺跡“西表島船浮・対馬要塞跡”の実態調査から見る教材の可能性—』琉球大学教育学部実践総合センター紀要(14) 琉球大学教育学部実践総合センター2007 P.121-141
石垣市市史編集室編『市民の戦時戦後体験記録第一集』石垣市役所1983
竹富町史編集委員会編『竹富町史第十二巻資料編 戦争体験記録』竹富町役場1996
伊波直樹・山本正昭『西表島・船浮要塞跡の実態と現状』紀要沖縄埋文研究4号 沖縄県埋蔵文化財センター2006 P.81-104
防衛庁防衛研修所戦史室著「戦史叢書沖縄方面海

軍作戦」朝雲新聞社1968
吉浜忍『『公文備考』にみる沖縄の海軍施設』史料編集室紀要』第28号 沖縄県教育委員会2003
沖縄県立埋蔵文化財センター「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(VI)一八重山諸島編一」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第41集2006
山本正昭・伊波直樹『文化財レポート沖縄県戦争遺跡詳細分布調査の成果と課題』日本歴史(703) 日本歴史学会2006 P.90-99
松島昭司『望楼発見物語 上—亜熱帯原生林を行く—』やいま(189) 南山舎2009.04 P.33-34
松島昭司『望楼発見物語 下—亜熱帯原生林を行く—』やいま(190) 南山舎2009.05 P.36-37
喜舎場永珣「八重山民謡誌」沖縄タイムス1967
竹富町史編集室『『鉄田義司日記』補遺』竹富町史だより第20号 竹富町史編集室 2001.9.28 P.8-54
原剛「明治期国土防衛史」錦正社2002
海軍省編「海軍制度沿革」巻三(1) 原書房1971